



かさぶたができるのはどうして

傷口を守るかさぶた

けがをして血管が切れると、血液中の、血小板とよばれるものが集まり、血液中からフィブリンとよばれる、細い糸のようなものがあらわれます。このフィブリンは、血液中の血小板や赤血球のつぶをからめながら、かたまりをつくりまします。このかたまりが、少しかたくなつたのがかさぶたです。

傷ができると、血はすぐにかたまってかさぶたをつくり、傷口をふさいで、出血したりばい菌などが入ってきたりするのを防ぎまします。次に、傷口から入ったばい菌などを殺すために、白血球などが集合し、傷が化のう(うむ)するのを防ぎまします。そして、傷口をなおして元通りにするために、皮ふは新しい細胞をどんどんつくるのです。

かさぶたをとってしまうと

傷口がふさがって傷がなおると、「かさぶた」は自然にとれていきます。

傷がなおるまえにかさぶたをとると、また血が出てきて、ばい菌が入りやすくなつてまします。自然にはがれるまで待ちましよう。(監修・保志 宏)

